

個人の時代、

仏教の現場から

TOP
Interview

釈徹宗さん

浄土真宗本願寺派如来寺住職・50歳
相愛大学人文学部教授
特定非営利活動法人リライフ代表

サリュ Spiritual

VOL 5 2012 Spring

現代の 日本仏教を

リードする僧侶として、名前が挙がるのは何故か禅僧が多い。玄侑宗久、南直哉、あるいは高橋卓志もみな禅宗に属している。他力主義だからではないだろうが、浄土系の僧侶の発信は乏しい。籠の中でさえずっている場合ではないだろう。

釈徹宗先生が、最初の本『いきなりはじめる浄土真宗』を刊行したのは2005年、思想家・内田樹先生と共著だった。その後、應典院で經典講座をお願いした。「星飛雄馬のお姉さんのように、横から他者を見ているのが浄土教」といった軽妙な語り口と、コーランを誦んじるほどの博学ぶりに、多数の参加者が虜となった。古今東西の宗教に精通。自ずと語り口に説得力がつく。

「半僧半俗がこれほど発達した仏教国はありません」との指摘に漏れず、やはり釈先生も多彩な顔を持つ。そのひとつが、自坊のすぐ近くにある認知症グループホームの理事長だ。生身の人間と向き合い、そこから仏教の実践原理を紐解いていく。海外からの視察も多い、という。

また、相愛大学の教授も務める。そんなご縁から、同大学と應典院では毎年、連携企画が開催。今年は「ポスト震災」がテーマとなる。仏教で「災後」はどう語られるのか。

耳を傾けよう。

多方面でご活躍の釈先生。
Twitterで「つぶやき」をされておられます。

今年の應典院×相愛大学の連携企画は6月、ブックガイド(p.7)でも紹介した小池龍之介先生を招き、釈先生との対談の予定です。

<http://twitter.com/shakutesshu>

釈先生と秋田光彦住職による『仏教のネオ』が全国書店で発売中。http://www.samgha.co.jp/products/shinkan/bksihinema.html





地域に根差した

〈信の共同体〉 を見つめて

社寺仏閣が「ある」ことの意味

現在、宗教と社会の関係をめぐって、多方面で活発な議論が起こっています。例えば、本誌4号でも取り上げたとおり、2011年3月6日には同志社大学にて「共生社会と宗教」と題したフォーラムが開催されました。また、本号のブックガイド(p.7)で紹介する書籍等でも、多様な立場から多彩な論点が紐解かれていることが実感できます。そして何より、そうした議論の発露として、東日本大震災の復興への実践があるとも捉えることができます。

千葉大学の広井良典先生らによる「地域コミュニティ政策に関するアンケート調査」(2007年5月)によれば、地域において特に重要とされる場所の1位は学校、2位が福祉・医療関連施設、3位が自然関係、4位が商店街、そして5位が神社・お寺等という傾向が見られたそうです。この結果に対して広井先生は、「神社・お寺などの宗教施設は、“彼岸あるいは異世界”との接点」として「コミュニティの中心」としての役割を果たしてきた、と分析しています。

日本に仏教が伝来した奈良時代から中世まで、日本では長らく神仏混淆の中で、地域に土着の生活様式が確立されてきました。多くのものを喪った哀しみの只中で、いかにして宗教施設が地域におけるコミュニケーションの拠点となりうるのか…。歴史的、文化的、社会的な関係の中で織りなされてきた「信の共同体」の有り様に迫ります。

甚大な被害をもたらした東日本大震災。地震そのものの被害よりも、地震によってもたらされた津波や液状化現象、さらには福島第一原子力発電所事故の被害は、想定外の範囲どころか想像の範疇を超えていた。「無縁社会」が叫ばれる中で発生した未曾有の出来事に対し、「つながり」の再生は、いかにして可能か。祝祭などを通じて「コミュニティの連帯を促してきた神社界の取り組みに迫る。

Spiritual
Opinion

地域に根ざす 信と儀礼

神社本庁総務部
震災対策室

東日本大震災の発生と 被災状況について

平成23年3月11日午後2時46分、三陸沖を震源として、観測史上最大となるマグニチュード9.0(最大震度7)の巨大地震が発生、午後3時15分には茨城県沖を震源とするマグニチュード7.4の地震が発生した。更に、翌12日午前4時頃には長野県北部を震源とするマグニチュード6.7の地震が、15日午後10時半頃には静岡県東部を震源とするマグニチュード6.4の地震が発生した。

また、11日の大地震によって大津波が発生し、東北地方から関東地方の太平洋沿岸部の市町村に壊滅的な被害を齎し、当該地震及び津波による死者は15,850名、行方不明者3,281名(平成23年2月15日現在・警察庁発表)、加えて、津波による被害を受けた福島第一原子力発電所では、大量の放射性物質の放出を伴う重大な原子力事故が発生し、福島県では、原発のある浜通り地域を中心に、周辺一帯の住民は長期の避難を強いられることとなり、これらを含めた全国の避難者数は、342,509名に上り、うち岩手・宮城・福島3県の自県外への避難者は実に70,820名に及んでいる(同・復興庁発表)。

此度の大地震は、神社本庁包括下の神社にも未曾有の災害を齎し、中でも岩手県、宮城県、福島県の東北三県では、8名の神職が犠牲・行方不明となっている。また、地震及び津波による神社施設の被害は1都15県に亘り、大殿、幣殿、拝殿等主要神社施設が全壊、半壊した神社は、309社の外、社殿以外の建物の損壊や鳥居、燈籠等の工作物の損壊(損傷)に至っては、実に4,585社にも及んでいる(平成23年7月15日現在)。太平洋沿岸部に鎮座する神社においては、高台で辛うじて津波の被害を免れても、氏子区域が津波により壊滅的被害を受け、今後の神社運営に多大なる支障を来し、神社存立の基盤が失われかねない危機に面している。更に、福島県においては、原発事故により立入りが出来ない警戒区域が設定され、当該区域内に鎮座する243社もの神社は、被害の状況すら確認できない状況にあった。

殊に、双葉町・飯館村など一町一村ごとの全員避難を余儀なくされることは、氏子の喪失と神社の無人化を意味することとなるため、福島県神社庁では、その他の地域においても将来、避難住民が帰還した際に、氏神神社がないという事態が起こらないよ

う、国や東京電力等の関係機関に対して要請を行うなどの対策を講じた。その後、これらの地域では、公益的な立入り申請を行うことで調査は可能となったものの、依然として高い放射能レベルや地震による道路の崩壊等により、被害状況の全貌把握には至っていない。この他、昨年7月には、福島県宗教法人連絡協議会を通じて福島県庁に、宗教法人が原発事故の損害賠償を国と東京電力に請求する際の指針を示すように求める要請書を提出した結果、東京電力の仮払い補償金の対象に宗教法人を含む公益法人も加えられることとなった。

こうしたなか、東日本大震災が齎した未曾有の災害は、過去の事例とは異なり特別な配慮と長期的な対処が求められることから、神社本庁では迅速且つ細やかな対応と対策業務の適切な遂行に資するべく、昨年7月に本庁役員会の議を経て、従来の災害対策業務とは分離した「震災対策室」を設置し、さらに10月には定例評議員会の議を経て、本庁事務所組織規程の変更と関係内規を整備し、被災神社の復旧復興に向けて対策を講ずることとなった。

震災発生後の対応と 復旧復興に向けた取組み

神社本庁では、地震発生後、直ちに災害対策本部を設置して情報収集活動を開始すると共に、数次に亘り災害対策本部会議を開催し、速やかな被災状況の把握及び復旧復興対策に向けた検討に取り掛かった。

また、東北地方太平洋沖地震以後も大きな地震が頻発し、東日本大震災が激甚災害に指定されたことから、此度の災害についての終息並びに復旧復興について斯界を挙げて祈願祭を斎行すべく、神社庁を通じて全国神社に通知を行うと共に、3月15日には、神社本庁にて復興祈願祭を斎行し、被災地及び被災神社の一日も早い復興並びに原発事故の終息を祈念した。

被災地域の神社の中には、氏子の避難所となった神社も存在

したが、震災直後の混乱の中で、避難所となっている神社の全てが行政の指定する避難所として登録されていないことから、行政からの支援物資が充分に行き届かない状態が続いた。加えて津波により生活物資や宗教活動に必要な装束類・祭器具等が流失した神社も多数存在したことから、関係団体である神道青年全国協議会に活動支援金を交付の上、協力して被災県神社庁への救援物資搬送に努めた。その一方で、被災県神社庁では必要物資が刻々と変化し、また場合によっては被災地への物資の運搬方法に問題を抱えている等、物資の提供を受けながらもその対応に困難を来す状況も想定されたことから、神社庁或いは管内神社から被災県神社庁に救援物資を提供する場合には、提供物資や搬入日時等、具体的内容を予め提供先神社庁に連絡するよう、留意方通知を行うなどの対策を講じた。

被災神社では、宗教施設が滅失し、法人事務や宗教活動が停滞している神社もあることから、神社本庁では、今次震災により被災した神社が宗教法人法第81条第2項及び第3項に該当する状況となった場合や、同第25条第4項による事務所備付書類の写しを所轄庁に提出することが出来ない事態が想定されることから、宗教法人法の弾力的な取り扱いについて文化庁に要請を行った。これに関連して宮城県神社庁では、津波により倒壊・滅失した神社の境内地を注連縄で張り巡らし、御柱と御幣を本殿跡に立てるなどして宗教施設としての現状を維持すると共に、復興へ向かう地域住民の心の抛り所となるよう対策を講じた。

また、伊勢の神宮からは格別の御配慮により、社殿再建に神宮宮域林より支援材を譲渡戴ける旨申し出が為されたことから、神社本庁にて加工費及び搬送費を負担し、被災県神社庁を通じて申請のあった被災神社に提供することとなった。さらには、被災神社の状況によっては、当該神社の神職子弟(神職後継者)の修学についても学資の支弁等も困難な事例が生じている可能性が危惧されたことから、被災神社の神職子弟に対し、修学支援見舞金を交付した。

その他、被災地域の神宮奉賛と家庭祭祀を継承するため、神宮御当局より神宮大麻及び小型神棚の提供を戴くと共に、神社本庁においても小型神棚を作製し、被災県神社庁に対して無償頒布を行った。

神社本庁ではこれまでも、被災神社に対して災害慰藉規程に基づく見舞状や見舞金を贈呈し、御神前に供して戴くと共に、災害等対策資金貸付や火災地震相互共済制度等により、被災神社の復旧復興に資してきたが、戦後最大という今次大震災に際し、今後も神社祭祀の伝統を護持継承するためには、全神社の総意のもと被災神社を支援する特別措置を講じる必要があった。そこで、被災神社の早期復興を促進すると共に、当該地における神社祭祀の伝統を護持継承するための支援基金を設置し、これを有効且つ適正に運営するため、昨年5月の定例評議員会において神社復興支援基金規程及び同施行細則を制定し、更に、被災神社の速やかな復旧を図るべく、災害等対策資金貸付規程を一部変更して、既存の長期無利息の融資制度を拡充した。

また、被災神社の建物等の復旧に係る指定寄附金制度については、日本宗教連盟、神道政治連盟等を通じて要望を行った結果、6月には財務省より告示され、実施を見た。尚、阪神淡路大震災時の指定寄附金は、社殿等の修理に要する募金のみの指定であったが、今次の大震災の甚大な被害状況に鑑み、被災物件(附属施設、土地・固定資産)の復旧のための募金も特例とされた。

その他、津波により祭礼行事に必要な装束類・祭器具等が流失した神社も多数存在することから、神社祭祀の伝統を継承し、神社の復興を通じた地域社会の再生を目途とした「東日本大震災による神社復興支援教化施策」を策定した。さらに被災神社の中には、鎮守の森にも被害が及びその復旧整備に苦慮されている神社もあり、今後、防災の観点からも境域林を防災林として位置づけ整備する必要もあることから、氏子並びに近隣住民の命を守る森として震災復興に向けた機運を醸成すべく日本財団等の協力による「東日本大震災による被災神社境域林の再生及び活性化支援施策」を策定し、その再生に努めることとなった。

神社義捐金については、震災発生より3日後の3月14日、神職の安否や神社の存否さへ危惧される中で、斯界挙げての緊急なる対処が望まれることから、岩手県・宮城県・福島県を除く都道府県神社庁に対し、全国神社等の篤志を募り、以て被災神社の復旧・支援活動に資するため、神社義捐金の募集を通知した。今次大震災の被災状況が逐次報告される中であって、一部神社庁では、管内神社に係る震災対策として、当面多額の資金を必要とする事態も想定されたことから、神社義捐金の納入状況を勘案し、被災県神社庁に対する復旧復興支援をより迅速且つ有効に推進すべく、神社義捐金の先行贈呈(岩手県・宮城県・福島県の各神社庁)を実施すると共に、一刻でも早い被災県への贈呈が望まれたことから被災した1都15県の神社庁に対し、7月下旬までに贈呈した。

神社義捐金は、8月末日の締切りまでに、全国神社はもとより、神社総代、氏子の方々、関係各位に至るまで、多くの方々の賛同を得て、実に12億8千万円を超える御芳志を頂戴した。

また、これまでの間、被災神社義捐への一層の理解と協力を得るため、東日本大震災神社関係写真パネルを作成して、各県神社庁での関係者大会を始め、支部、神社、指定団体等でパネル展を開催するよう貸出しを行うと共に、神社本庁では、神社義捐金とは別に日本赤十字社が行う「東日本大震災義援金」に対し、1千万円を贈呈した。

被災地の一日も早い復興を願って

大震災5日後、岩手・宮城両県だけでも30社を超える神社が避難所となり、多いところでは数百人の付近住民が神社へ避難していた。被災直後から行政が指定した避難所では支援物資が自衛隊などから届けられたのに対し、神社などの民間施設に避難した

住民には物資がなかなか届かない状況であった。そうしたなか、比較的被災の少なかった神社を拠点として緊急救援物資の搬送が展開され、各地から寄せられた物資が避難所や神社を通じて避難住民に届けられた。また、地勢的にも被災を受けにくく、社務所や集会施設等を併せ持つ神社においても同様の支援体制が取られた。また、多くの神職は、被災直後から地元消防団として地域警戒や遺体搜索、瓦礫撤去等に奔走し、なかには地元青年会議所理事長として復興の陣頭指揮に当る等、地域社会において十分にその役割を發揮された。

こうした事案を今後、行政は危機管理の面からもどう捉えるのか、政教分離問題だけでは捉えられない重要な事柄が今次大震災では数多く浮き彫りとなったのである。このような事例は他宗教においても数多く存在したと思われる。

その一方、政府の復興構想会議で玄侑宗久氏は、提言の支援対象に「神社・仏閣・教会等」の表現を盛り込むよう提案し、さらに

(写真：東松島災害ボランティアセンターにて・2011年4月24日／写真提供：深尾昌峰)

亡くなった方に思いを馳せ、花を手向ける……。喪失の悲嘆に、造花をつくり、寄り添ったボランティアがいる。





瓦礫の向こうに見える、小さな祠。
 幾年にもわたって、地域を見守ってきたのだろう…。

(写真:陸前高田市気仙町・2011年4月30日)

自然を生きる

東日本大震災発生後の11カ月後、政府はやつと復興庁を発足させた。本書は奇しくも震災の1カ月前に「心の復興」を立ち上げ、発信された。すべてが「システム化」によって管理された社会、そこに機能するのは縦軸のみだ。横軸という縁起(仏縁)の世界は排除されている。しかしそこにこそ人の生き筋がある。縦横斜めの軸に息づく真の日本文化、日本仏教の再発見と実践が今程求められている時はない。二人は見失われた横の文化を探る。「仏教の場合、因果が縦であり横の発想が縁起だ」として、禅は両行に生きるると玄侑。浄土仏教はやはり法然親鸞の「自然法爾」に尽きると釈。対談の最終で「江戸の閉じ方」に着目し「適度に閉じたコミュニティ」は「東北にひとつのモデル」が見出せるとの指摘は復興への大いなる暗示と言える。

玄侑 宗久・釈 徹宗 著
 ●東京書籍(1,500円+税)



小池 龍之介 著
 ●ディスカパー・トゥエンティワン(1,000円+税)

3・11後の世界の心の守り方「非現実から現実へ」

現代人は深く淀んだ「渴愛」の海に漂泊している。本書はその現実を見据え、震災後の復興する日本人の心と社会の再デザインを簡潔に提言する。震災による苦しみを襲ったのは「第二の矢」。そして思いがけず芽生えた感謝、優しさを慈悲へと育てていく方法。かくして本当の幸福と安らぎという心の転換が得られる。第一の矢とは「心の中で起こる否定的感情の増殖。この「心の二次被害」をどうくい留めるか。またボランティア活動中に生じる「優しさ」には果たして相手への「支配欲」が無意識に伴ってはいまいか。他者と自己を捧げる利他心の中にしか慈悲は実現しない。そして問われるのは幸福感を「快感原理」によって計測している現実。故にまづ現代情報化社会のあり方がいまこのチャンスに根底から見直したいと主張する。

宮崎 哲哉 著
 ●サンガ(1,600円+税)

仏教教理問答

対論冒頭、高村薫の問題作『太陽を曳く馬』の殺す殺される人間の悪、オウム真理教問題をぶつけていく。「オウムには『空』が抜け落ちていた」と白川密成は推論する。以下、宗派が異なる僧侶たちとの対論が展開する。生と死の意味、宗教と社会の接点、共同体と葬送儀礼の崩壊、仏教における聖と俗、大乘仏教とその源泉、阿彌陀仏の実体、死刑制度の宗教的是非そして大災害の救済論に及ぶ。著者は大震災を「純然たる自然現象」と捉え「天罰論」は戯論として斥けるが、原発事故等には「業が関わっている」と断る。「だからこそ」法然の「俱舍」処や還相回向の教えが「根源的な恐怖」からの「真の解放」をもたらすといひ切り、よって論理やこじつけを越えた「信仰力」による世界観をしっかりと提示したいと林田康順が受ける。

利他主義と宗教

利他主義とは、社会通念に照らして困っている状況にあると判断される他者を援助する行為で、自分の利益をおもな目的としない」と定義するゆえに「諸宗教が、利他主義、他者への思いやりと実践に関する教えを持っている」。現代社会には、犯罪、貧困、環境問題、自然災害、テロリズムなど多くの問題が山積している。が、いま多くの人は「従来のような行政システムに頼らず」「利他」性に富む市民社会を目指した活動を展開している。著者は欧米の慈善事業、ボランティア、利他主義の実態を取材、分析検証した事例を報告。日本の「宗教の社会貢献活動」も紹介する中で今回大震災に見られた「おかげ様や恩返し」の強い念いがベースとなる「無自覚の宗教性」にもとづいた「共感縁」という利他心にも大いに期待を寄せる。

column

皇學館大学

板井 正斉

Masanari ITAI

「言挙げせず」の神社界も、時代の変革期に、社会に発信することの必要性を認識して動いている」とは、震災後の神社界の動向に対する稲場圭信氏のコメントである(中外日報、2012年1月12日)。

ながらく神社界は、社会への発信(アピール)がわかりにくいと揶揄されてきた。他宗教においては、いわゆる宗教的・精神的救いを色濃く打ち出した社会への取り組みが、福祉にせよ、教育にせよ、宗教の持つ社会との独自の関係性として培われてきた歴史を持つ。確かに宗教性の違いはあるものの、宗教法人という現代社会での同類を考えれば、情報発信のわかにくさは、時に命取りにもなりかねない。

宗教と社会との互恵性を、社会関係資本(ソーシャルキャピタル)の考え方から捉えなおす時、バットナムの「内部結束型(Bonding)」と「橋渡し型(Bridging)」という類型がよく用いられる。本誌読者にあらためて説明するのもおこがましいが、より水平的で自発的な市民活動等に代表される「橋渡し型」の(強み)が、社会の評価や信頼につながり、「内部結束型」の閉塞的で惰性的な(弱み)を打開することになると期待されている。その意味において筆者も、神社を応援する立場から、折に触れて社会へ発信することの重要性を「神社の底力」等と称して拙くも訴えてきた。

しかしながら、このたびの東日本大震災をめぐる神社界の対応からは、「内部結束型」の(強み)を強烈に見せつけられた。神道青年全国協議会をはじめとする関係団体の支援は、大変素早かった。被災地では、自らも被災しながら、地域から自然発生的に避難してきた人々を受け入れた神社も少なくない。もとより行政による避難所指定はなく、神社の側にも

必ずしも避難設備が十分ではない中で(この点は今後の大きな課題と思うが)、公の支援の手はなかなか届かなかったという。そのような状況において、神社関係者による直接支援は、被災した方々にとって、この上なく心強い存在であったであろう。このような初動が組織的かつ効果的に行えたのは、まさに内部結束を強めてきたからこそその対応だと考える。(ちなみに市民活動の立場から被災地支援に携わってきた筆者は、「行くのか、行かないのか」を関係者と議論している段階でこのことである)ところが、このような動きは外部からは見えにくいし、見えた所で、なぜ神社関係者だけを支援するのかという、より広い利害関係への評価基準には耐えられない。

それでも、この非常時に地域住民が自然発生的に避難所ではない神社へ逃げて来られたという事実からは、「神社がそこにあったから」としか言いようのない世代を超えた文化的な「橋渡し型」反応を見ても、このように動いていくのか。津波ラインに式内社が鎮座しているというようなトピックはまさにその一端といえるだろう。

今回、筆者が神社界の対応から学んだことは、宗教と社会との関係性を「橋渡し型」の(強み)ありきで論じるのではなく、「内部結束型」の(強み)はそれとしてしっかりと評価しなければならないということである。おそらくは、「橋渡し型」と「内部結束型」の(強み)と(弱み)には、社会関係資本が分類してきたよりも、もう少し複雑で、相関の見えにくい歴史的文化的な、あるいは環境的な関係性があるように考えている。だからこそ「社会に発信することの必要性を認識して動いている」もう一歩先を葛藤しながら考えあいついでいたい。



出席者

マーク・ロウ
マック・マスター大学准教授

杉本 恭子
フリーライター

秋田 光彦
浄土宗大蓮寺住職・應典院代表

Table Talk

日本の お坊さんは 面白い！



日本のアニメに出会って 仏教へ

●秋田 今日、仏教界の外からお坊さんを見ているお二人に、“他者から見た”お坊さんについてお話を聞いてみたいと思います。まずは簡単な自己紹介をお願いします。

●マーク 17年ほど日本仏教の現状を研究しています。「檀家制度以降のお寺はどうなるのか？」をテーマに、永代供養墓から見るお寺の現状を書いた『Bonds of Dead』という本を昨年出しました。今は、高僧ではなく“小僧(しょうそう)”，つまりごく普通のお坊さんをテーマにした新しい研究のために1年間日本に滞在しています。

●秋田 そもそも日本仏教に興味を持ったきっかけは？

●マーク 子どもの頃から、日本のアニメや文化が好きだったので、大学では日本語を勉強しました。でも、あまり役に立っていないなあと思ったので辞めて、1988年に東京に来てしばらく英会話教師をしながら日本語を勉強した後、世界旅行に行っただけです。インドのバラナシを訪れたとき、日常生活に現れている宗教を初めて見て衝撃を受けました。それで、カナダに戻って大学に入り直して宗教学を研究したんです。

日本と宗教を研究するのならやはり仏教です

から、京都大学の研究員として来日し、「わびさび、ものあはれと仏教」を研究しはじめました。毎朝大徳寺で坐禅をしていたのですが、各地のお寺を訪ねてお坊さんたちと話すうちに、葬式と仏教というリアルなテーマが浮上してきたんですね。

●杉本 私は、旅行誌などのお寺取材をきっかけにお坊さんに興味を持ちました。ちょうど阿修羅展で仏像ブームがはじまった頃でしたが、私には生きているお坊さんのほうが面白かったです(笑)。それに、お寺の可能性を広げようと動いているお坊さんたちの存在も気になっていたんで、観光以外のアプローチで関わられるお寺の存在を伝えたくて、『彼岸寺』にお坊さんインタビューの企画を持ち込みました。

お坊さんには “コシがある”人間が多い

●杉本 マークさんは、『Bonds of Dead』の後に、新たに研究テーマを選ぶにあたって、さらにお坊さん研究を深めておられるのはなぜでしょう？

●マーク 僕が一番尊敬しているのは『男はつらいよ』の寅さんです。あり得ない人物だけど、全国を渡り歩いて人と話をして。僕は宗教学者だし、人生の意味を考えているのはお坊さんだと思っています。全国を巡って夜遅くまでお坊さんとお酒を飲み、仏教の話をする仕事はすごく楽しいです。これは仕事というよりは、もう僕の使命ですね。自分の歩んできた道すべてを含めて、僕はこれしかできないしせざるをえないです。

人間を理解するためには、宗教を研究するのが一番いいと思います。僕は、すべての宗教は、経典のなかにあるのではなく現場と経典の間にあるネゴシエーションにあると思って

います。人々の生活や暮らしと教えの間で動いているもの、話したり、悩んだり、闘ったり、泣いたりする現場にあるもの。それを把握するには、現場の人物と話をすることが大切です。

●秋田 マークさんは日本のお坊さんのどこに一番魅力を感じますか？

●マーク お坊さんはいいい意味で変わった人が多いと思います。まずは、毎日死と向き合っている人間として深みがある、うんと言わなければならない人間だと思えます。いろんな人から「マークは面白いお坊さんばかり知っているけど、うちの宗派のお坊さんは7、8割アカンよ」と言われます。でも、僕はあちこちを回って、ホントに悪いお坊さんはいるのかな？ と思います。「お金のためだけにやっている」と言う人もいますが、本当にお金のためだけにできることなのかな？ と。

●杉本 お葬式や法要をお金のためだけにできるわけがない？

●マーク そうそう。どんなお坊さんも、子どもを死なせてしまった母親や自死で家族を失った遺族に「何をしてあげられるのか」と悩んだ経験があるとします。ほんとに深い悲しみに向かい合っていないお坊さんはあまりいないと思いますね。日本人はみんな「葬式仏教だ」とブツブツ言うんだけど、あの悲しみのなかに誰が入っているんですか？ お坊さんだけでしょう。そんな役割を担っていることを、日本全国にわかってほしいと思うんですよ。日本人はみんな「お坊さんは偉くて普通の人間と違う」と思っていることが、今の日本仏教の大きな問題点じゃないでしょうか。

外側にいるからこそ 聴けることがある

●マーク 僕はいつも、「マークは外人だから

らこういう研究ができる」と言われています。でも、杉本さんと会って日本人でもできるんだなと思いました。

●杉本 私は宗教を専門にしているわけでもない、ごく普通のライターでしかも女性だったということが良かったのかもしれない。

●マーク それはあるかもしれないね。お坊さんに限らず、人間は自分のことを話したいんだよね。お坊さんは、自分の悩みや迷いを言う相手がない。檀家さんに言うわけにいかないし、家族だからこそ言えないこともある。インタビューの途中でカウンセリングみたいになることがあります。

●杉本 「お坊さんは人の話を聴く仕事なので自分のことをこんなに話したのははじめて」と言われることはありますね。

●秋田 話を聴いてもらうことで、僕らが自問するきっかけになっているんでしょうね。ところで、今回マークさんが取材しているお坊さんはどういう風を選んでるの？

●マーク 特に基準はなくて、お坊さんに紹介してもらっています。今回は1年間の滞在ですが、半年ですでに120人近くになってます。最終的には200人を超えるんじゃないかと思っています。

●秋田 半年で120人も!? 今回の研究の成果はどういう形にまとめるのですか？

●マーク 英語で2冊、日本語で1冊になる予定です。英語のものは、世襲、育成、寺離れ、地方／都心部、在家出身／寺生まれなど、いくつかのテーマでそれぞれの声をまとめていきます。もう一冊は、何人かのパイオグラフィーから人生のなかで現れてくるお寺の現状を書きたいと考えています。日本語の本は、“カナダ系関西人”から見る日本仏教というテーマ。島田裕巳さんの『葬式は、要らない』や勝桂子さんの『いいお坊さん、ひどいお

青い目に映る日本仏教のいま

「カナダ系関西人です」といたずらっぽく笑う

マーク・ロウさんは、現在までに150人近い

日本中の僧侶たちに取材を続ける宗教研究者。

全国をめぐり、日本仏教の現場に密着しながら、

等身大の僧侶の姿を捉え伝えようとしている。

同じく、僧侶へのインタビューを続けている

フリーライター杉本恭子さんとともに

マークさんの目に映る日本の僧侶の魅力を聴いた。

司会 秋田 光彦



マーク

ロウ

カナダ・マックマスター大学宗教学科准教授。米国フリンストン大学修士課程を経て、京都大学大学院修士課程に進み、現代の葬式と仏教を研究テーマとする。2011年、東京大学宗教学特別研究員として来日し、日本信託インタビューを続ける。阪神タイガースの熱烈なファン。

坊さん』などのお坊さん墮落説に対して、ごく普通のお坊さんとお寺の状況をまっすぐに伝える本にしたいですね。

●杉本 私も、お坊さんたちとの出会ってきた経験から今のお坊さんをリアルに伝える本を書きたいです。

お坊さんインタビューのコツ!?

●秋田 どの宗派のお坊さんにも質問すること、リクエストすることはありますか？

●マーク 以前は、質問内容を決めて細かく聴いていたのですが、近ごろは経歴から入って相手の話したいことが出てきたら、その話に深く入っていくほうが面白いのでフリーにやっています。

●秋田 キメの質問って何かあるの？

●マーク あります。たとえば「私の代わりにこの研究をしているとしたら、全国のお坊さんに聴いてみたいことは？」と尋ねて、その質問を本人に投げ返すんです。あるいは「宗祖に出会えたら聴いてみたいことは？」と尋ねることもあります。東京の経王寺住職 互井観章さんから教わった「自分のお葬式をやってほしいお坊さんと出会ったことはありますか？」という質問は、理想の僧侶像を聴くうえで非常に面白いです。よほど信頼し尊敬していないと「お葬式をしてほしい」と思えない。たいていの人は1人か2人しか名前が挙がらないし、まだ出会っていないと答える人も多いです。

●秋田 杉本さんはいかがですか？

●杉本 マークさんと似ていますね。「どのようにしてお坊さんになったのか」「これからどんなお坊さんでいようと思うのか」ということを中心にお話を聴かせていただいています。歩んできた道を一緒に振り返っていただいているから、これから先を一緒に見せていただくイメージです。

●マーク 若いお坊さんへのインタビューが多いんですか？

●杉本 年齢はさまざまです。年齢の話で言えば、お坊さんもその年齢のときしか語り得ないことがあるのかなと思います。若い時にしか言えないこと、歳を重ねたからこそ言え

ることがあって。ある年齢の人間と仏教がクロスしてはじめて出てくる言葉があるのを感じています。

仏教を伝える場を“デザイン”する

●秋田 今のお寺の現状について、マークが会ってきたお坊さんたちはどう捉えているの？

●マーク 檀家制度が終わっていくことを認めようとしらない人もいます。50代、60代の住職は「自分の代は大丈夫」「もうしばらく大丈夫」と思っている人も多いかもしれません。

●秋田 葬式仏教や檀家制度がダメかどうかという経営的な危機感よりも、僕は仏教そのものの教えがないがしろにされる危機感のほうが強いんですけどね。若い僧侶たちにも「やっていけなくなる」とお寺の“経営危機”を相談されますが、やっていけないなら辞めたいと思うんですけどね。

●杉本 お坊さんであるためにはお寺を持つことは必須条件ではない、と。

●秋田 そうです。お寺を所有物のようにしてやり続けようとするくらいならね。僕はもっとフリーランスのお坊さんが出てきていいと



杉本 恭子

フリーライター。同志社大学文学部社会学科新聞学専攻卒業。同大学院文学研究科新聞学専攻修士課程修了。ネットコミュニティ運営ウェブサイトに編集等を経て、京都をベースに取材・執筆を行うライターに『彼岸寺』にて坊主めぐり現代名僧図鑑を連載中。

思います。

●マーク 昔は、お坊さんが医者や学校の先生の役割も担っていて、お寺は教育や福祉の中心でした。でも、各分野が専門化し社会制度が整うにつれてお寺からそういった機能は失われていきました。今ふたたび、お寺に専門的な機能を取り戻したいという声もあるけれどムリだと思いますね。これからは、若いお坊さんがいるんな世界に「仏教を運んでいく」ことが必要ではないでしょうか。

●秋田 イベントや『彼岸寺』のようなウェブは、伝え方の多様化として捉えられると思います。ご本尊をバックに布教する古典的なやり方のほかに、イベントやライブ、メディアを使って仏教を伝える場をデザインしていく試みが増えたほうがいいですね。お坊さんは、何かに回答を与えるというよりは、場を提供することで関係性の持つ力を引き出していくファシリテーターのような役割なんじゃないかと思うんです。

震災後の世界に生きるお坊さんたちへ

●秋田 東日本大震災の被災地支援活動では、宗派の動きを待たずにすばやく個人レベルで動き出したお坊さんが多かったです。避難所や現地の支援団体と自力で交渉して、その状況を『Twitter』などを通じて支援者たちと共有して。阪神・淡路大震災のときは宗門で動いていたのが、今回は宗派どころか宗教の枠を超えた活動も展開されています。

●マーク 他の宗派の坊さんとつきあうのはいいことですよ。日本仏教の弱点のひとつは、宗派間の壁が厚いことです。もともと、日本のお坊さんは、いろんな宗派で勉強していた歴史があります。自分の宗派のことしか学ばないのはもったいないと思います。

個々のお寺レベルでは宗派よりも地域性の違いの方が大きいです。都心と地方ではまったく状況が違うし、地方でも農村と漁村でもまったくお寺のあり方は異なります。漁業は命を賭ける仕事だから、信仰に関して真剣さが違うんですね。若い僧侶の活動が活発だというのは都心部の話でしょう。地方に行ったら「わかってないな」と言われますよ。

●杉本 そうでしょうか。地方のお寺でも、地道に地域と関わりながら新しいことをはじめている若いお坊さんはいらっしゃいます。また、今の日本では地方で住むことに関心を持つ若い人が増えていて、震災以降はそういう流れが加速してきます。住職次第では、お寺が新しい人たちと檀家さんをつなぐ場になる可能性もあると思います。

●秋田 震災を軸にして、今後の日本のお坊さんのあり方に変化があるかどうか、震災が起きたことによるお寺や仏教への影響はあるかどうかについてはどう思われますか？

●杉本 震災後、日本では政治や社会、情報やメディアへの信頼が失われるなか、まずは自分を信じなければいけないと思います。宗教は、自分を信じるためにあると私は思っています。ある意味、社会不安を引きうけるカルト的な宗教が台頭する危険性もあるでしょうが、自分を見つめなおすひとつのやり方とし

て、仏教にポジティブな目を向ける人が増える可能性もあるのではないのでしょうか。その可能性に呼応するお坊さんもたくさんおられると思います。

●マーク 僕が興味を持っているのは、パーソナルな影響力の方です。たとえば、ある女性住職は震災後の供養ではじめて、供養の持つパワーや意味に気が付いて自信を持てるようになったと話してくれました。たぶん、10年後に今の20代、30代のお坊さんにインタビューをしたら、東日本大震災をターニングポイントとして語るだろうと思います。

また、被災地支援についても、教団ではなく個人で動いた人が多かったのは、自分のお寺やネットワークの力で動かなければと思ったわけですよ。取材を通じて発見したのは、教団という大きな組織以外に、お寺やお坊さんごとにネットワークを持っているということです。宗門大学の同級生や修行道場の仲間など、個人のネットワークの持つパワーを確認するきっかけにもなったのではないかと思うんです。

●秋田 悲しみには、人と人のつながりを回復していく絆の役割もあります。震災で、これだけ多くの人が亡くなり、いまだ遺体が見つからないままにその死を受け入れなければいけない人たちがいらっしゃいます。大きな喪失のなかで「がんばろう」ではなく、人の優さや弱さにもう一度着目しなおして、「だからどうつながり、支え合えばいいのか」という転換が起きるのではないのでしょうか。そのつなぎ手として、お坊さんはいいいポジションにいると思います。

綴られた、お坊さんの「声」

『Bonds of Dead』(Mark Michael Rowe・著)

<http://press.uchicago.edu/ucp/books/book/chicago/B/bo12046404.html>



ポスト檀家制度の日本仏教をテーマに、永代供養のあり方を描いた一冊。日本のお寺の現状をていねいかつ鋭い考察で書かれており、日本語訳の出版が期待される。

※書籍版は布表紙と紙表紙版があり。電子書籍版も上記のウェブから購入可能。

『彼岸寺』

<http://higan.net>



超宗派インターネット寺院 虚空山彼岸寺。若手僧侶や仏教に関心を持つ人が集い、仏教関連コンテンツを発信するとともに、「新しい仏縁」をプロデュースするウェブサイト。

日常と非日常の狭間で。

共生・地域文化大賞の5年間から
寺と僧侶の役割を考える



浄土宗は平成23年(2011年)の宗祖法然上人800年大遠忌を記念して、平成19年に「共生・地域文化大賞」を創設し、本年度をもってこの5年間が終了する。この大賞は、地域の社会課題の解決に取り組むNPOや市民活動を表彰し、お寺とNPOの協働事例やお寺が単独で行う取組に助成を行ってきた。大賞への応募団体は5年間の累計で557団体、第3回から行った助成部門(共生事業助成金・小さな共生助成金)に108件。そして第3回、4回に創設したアイデア部門の応募件数は一般の部2853件、中学生以下の部1141件。第4回のみに行った就学前児童の部では585件。以上合計665団体、4579人と、多数の募集があったことは、地域市民が多く関心と希望をお寺に寄せてきている結果だと思う。私はこの「共生・地域文化大賞」の運営委員として第4回、5回に関わらせていただいたが、総括の年に東日本大震災が発生し、日本人の持つ「喪」の文化や日本民俗の「葬送」儀礼と仏教寺院・僧侶の意味や関係が改めて問い直される契機となった一年であったと感じている。

1 敬虔な仏教徒の感性

さて、この5年間の一連の動きを総括するシンポジウムとして、「きずなシンボ」「地域コミュニティーとお寺の未来」が2月11日に佛教大学(常照ホール)に於いて開催された。伊藤唯眞猥下による特別講話、武田和清遠忌事務局長の基調報告の後に、パネル討論があり、大賞選考委員長である、「公益財団法人さわやか福祉財団」の堀田力理事長、第3回の共生・地域文化大賞を受賞した「NPO法人北九州ホームレス支援機構」の理事長であり日本バプテスト連盟東八幡キリスト教会、奥田和志牧師、浄土宗僧侶であり、第3回の助成団体の「NPO法人新宿ホームレス支援機構」と協働された「ひとさじの会」の吉水岳彦事務局長、「第一生命経済研究所」の小谷みどり主任研究員を迎えた。共生・地域文化大賞の運営委員長であり、應典院の秋田光彦代表のコーディネー

ターのもとに、「お寺の未来」は果たしてあるのだろうかという厳しい問いかけにより開始された。

私は「敬虔な仏教徒」だと良く自己紹介をするのだが、母子家庭で育ったため、日々養育してくれていた祖母や祖父の影響で、当たり前のように朝にお勤めをし、頻繁にお寺へお参りする家に育った。そのため、法華経の方便品や寿量品などを誦んじ、菩提寺では人の通過儀礼(お宮参り・七五三・成人式・結婚式・お葬式)のほとんどを勤め、毎月の月参りにはお坊さんに来ていただくことで、お寺と家の確固とした関係性を保っている。しかし一方で、キリスト教のミッションスクールに通い、15年間はキリスト教を基盤とする市民活動団体の専従職員をしていたため、日常活動の中では、異なる宗教であるキリスト教の教えに触れることの方が多く、教義は、仏教経典よりも聖書の方が実は詳しいかもしれない。このように折々の非日常である通過儀礼としての仏教行事に勤しみ、日常活動であるキリスト教基盤の活動の二つの宗教性の中で過ごしたことで、より客観的に今の仏教界が置かれている状況を感じる「感性」のようなものが醸成されてきたように思う。

2 死と再生への思い

そんな私が「共生・地域文化大賞」の運営委員として関わらせて頂き、助成部門の審査や運営委員会での経験を通じて、今回の総括シンポで改めて感じたことがいくつかある。

今回、シンポ終了時に「死と再生」という言葉をふと思い出した。私が考える「死と再生」は、大切な他者の死を通じて、自らの再生を果たすこと。簡単に言うとグリーフケアの過程なのだが、この過程に僧侶が伴走してほしいとまず痛切に感じた。しかし、この葬送を含む「死」の現場で遺族に寄り添うためには、その人との日常を共有していることが大事なのではないだろうか。第一生命経済研究所の小谷研究員から発せられる言葉は刺激的で、「葬式仏教を極めることが伝統仏教に求められているのではな

いか」「僧侶でなくてもできることをするのではなく、僧侶でできないことをしてほしい」とする一連の発言にはハッとした。しかし、いや、だからこそ、小谷研究員の話とは逆説的ではあるが、「僧侶の本分」である葬送を全うするための日常の社会活動なのではないだろうか。いかに他者に寄り添って、その人との関係性を結び合わせているのかが、その日常の先にある非日常の「葬送」を本来の鎮魂のプログラムとして生起させる僧侶としての役割だと思う。私がこのように考えるに至ったのは、大切な人の納得できない急死に直面したとき、両者の関係性や私の日常をよく知って下さっている僧侶が人生の先輩としての救いの言葉を告げてくださり、死後の様々な事柄に伴走して下さったことで、葬儀で弔えなかった気持ちに整理がついた経験に基づく。

3 協働で結び目を結ぶ

もう一つの点は、僧侶である吉水さんの「縁をためる」という言葉と、やはり僧侶である秋田さんがシンポの最後に言われた「結び目はしっかり結ばなくてはいけない」という言葉から感じたことであるが、「縁をためる」のがお寺という場。「むすび目をしっかり結ぶ」のが僧侶という人。その両者が中世の社会同様、混迷した現代には必要であり、「縁をためる」≪動かない場≫としての寺の機能と、「結び目をつくる」≪動く≫僧侶の役割の両者が相まってこそ、日常の社会的な活動と非日常の葬送が全う出来るのではないだろうか。

また、奥田牧師が発言された「協働は傷つけることから出発する」という視点も心に残った。私は子育て・子育て支援活動のネットワーク化に関する研究と実践を行っているが、子どもも時には危険な事柄や場面で「身体や心を傷つけられる」経験を通して育つことを痛感している。現代社会は「傷つく」ことを極度におそれ、それを回避している傾向にあるが、団体の育ちといえども子どもの育ちも同様に「危険」や「傷」が必要なのである。また、協働することは「私とあなた」の関係でないといけないこと、目的達成のための他者利用とな

ると、「私とそれに貶めて、相手をモノ化してしまうことになる」という奥田牧師の指摘は、活動されてきた宗教者の意見として、心に沁みるポイントであった。協働という営みは、両者が水平の関係のなかで、「支配する・される」という関係性から脱して形成されるものであることを改めて問うたものであった。

4 魂を救い、鎮魂へ…

堀田さんが「共助」という役割を僧侶がつとめるために、ホスピス病棟の本人や家族の魂を救う場に僧侶がぜひ入ってほしいとする願いは、「死と再生」の物語の現場に僧侶という宗教者が「日常」の活動として入り、「非日常」である鎮魂のプログラムである「葬送」の本当の導師となれることを示唆されたのではないか。「新たな鎮魂のプログラム」を日常活動の延長上に据えることを「NPOとの協働」というチャンネルを通じて仏教界が考えるためのこの5年間であったのではないだろうか。

また、現在は「NPOとお寺」という別々の団体の水平的な関係性で語られるが、お寺もNPOであることを自覚し、社会活動という日常を行うお寺が増えてくれば、「NPO」というというカテゴリーの中に包括されて語られる未来もあるではないかと思った。5年間の取組は終了するが、この5年間の総括を礎に、浄土宗が更には日本仏教界がどのような展開をみせていくのかに期待し、私もその日常の活動を行う寺院や僧侶と共に市民として一緒に走っていきたいと願っている。

齋藤 佳津子(さいとう・かつこ)

京都子ども・家庭研究所代表。京都市中京区の生まれ育ち。途中、大学で東京、大学院でアメリカのボストンに滞在。1996年から2011年3月まで(財)京都YWCAのスタッフとして、子育て支援の活動を担当。その後、京都子ども・家庭研究所を設立。共生・地域文化大賞運営委員を務めてきた。

WORKS

2011年8月から2012年12月までに起きたさまざまな動きを、レポートします。

法輪は



不安の時代を生きる技法とは。 香山リカさんと語り合う。

去る10月29日、相愛大学が主催するシリーズ人文科学の挑戦「不安な時代を生きる技法」が、同大学本町学舎で開催。精神科医の香山リカさん、宗教学者の釈徹宗さん、MBS(毎日放送)「ちんぷいぷい」の西靖さんと、秋田光彦住職が語りあいました。

震災、原発、孤立や無縁など不安の度合いは高まるばかりで、現代人はこれからの生き方を見出せないままです。不安のメカニズム、現代特有の悩みなど90

分に渡って、異色の座談となりました。

秋田住職は、「不安は必ずしも取り除くべきものと考えない」と発言し、應典院の演劇の若者たちや「年越いのちの村」など不安から出発したつながりや連帯について述べました。また、儀礼や作法といった長年積み上げられてきた形式の中に、心の安定に何らかの影響を与える役割があるのではないか、との提言をまとめました。



10月29日

相愛大学人文学部シンポジウム
「不安な時代を生きる技法」



『仏教シネマ—お坊さんが読み説く映画の中の生老病死』
1,500円+税
サンガ

10月26日

シネマディクトの本領発揮。 宗教から映画を読み説く、意欲作。

秋田光彦住職は生粋のシネマディクト(映画中毒者)ですが、昨年10月に対談本「仏教シネマ〜お坊さんが読み説く映画の中の生老病死」を上梓しました。

古今東西に映画を手掛かりに、人間が避けて通れない「生老病死」を、お馴染みの宗教学者釈徹宗先生と語り尽くす内容で、2007年以来、朝日カルチャーセンターで断続的に続いた映画トーク「往生シネマ伝」が下敷きになっています。

映画の中に潜んだ宗教性や、死生観とは何か…往年の小津安二郎の映画から「葬送」の意味を掘り起こし、ゾンビ映

画から反イスラムの感情を読み取り、またアジア映画の秀作から死者のまなざしを感じとるなど、「こんな映画の見方があったのか」とコアな映画ファンからも好評を博しています。

病院で、生と死を考える。 医療と仏教の連携は可能か。

去る11月5日、大阪府立急性期・総合医療センターにて、同センターと森ノ宮医療大学、相愛大学の3者連携によるシンポジウムが開催され、秋田光彦住職が宗教者を代表して登壇しました。一昨年の「生と死を考える」シンポに続く企画ですが、前回を超える満場の250人が集まりました。

今回のテーマは、「安らぎのがん医療」として、スピリチュアルも含めた全人的ながん医療。現代医療はもちろん、東洋医学、宗教、コミュニティ、家族が、どのような条件・基盤を作っていく必要がある

か、カテゴリーを超えて4時間に及ぶ議論となりました。

秋田住職は、大蓮寺や應典院のエンディングサポートの活動紹介をはじめ、自宅死が全国一である奈良の地域性や病診連携などコミュニティケアの最前線について発言しました。

病院が生死を扱うことは稀ですが、僧服姿の仏教者が壇上で発言することも極めて異例のこと。改めて「時代の変化」を痛感しました。



コミュニティ・シネマ・シリーズVol.18
「震災に映画は何かができるか」

11月24日

映画監督河瀬直美が語る。 仏教と映画は、地域でつながるか。

映画を市民目線で読み解く、應典院コミュニティ・シネマ・シリーズもすでに18回を数えますが、去る11月24日は、震災後のコミュニティや生き方考えることをねらいに、映画「3.11 A Sence Of Home Film」上映とトークを開催しました。

この作品は、カンヌ映画祭では常連となった奈良市在住の河瀬直美監督の呼びかけで、世界各国21人の監督がそれぞれ3分11秒の短編映像を寄せたオム

ニバス映画。上映後には河瀬監督自身が舞台上に立ち、「震災を自分ごととして考える」として、この作品への思いを語られました。

その後のディスカッションには、この作品にも参加されている映画監督の山崎都世子さんやなら国際映画祭理事・中野聖子さんらと、映画祭の背景、製作者としての思い、映画祭の背景、映画の持つ力などについて議論。それぞれの立場

表現を通じた、関係性の再構築。 全国アートNPOフォーラム、開催。

去る10月16日、文化芸術領域で活動するNPOのセッション「全国アートNPOフォーラム」最終日が應典院で開催。全国各地のアートNPOスタッフ、研究者、学生約100名が集まりました。

フォーラムでは「震災とアートそして自治」をテーマに、同志社大学大学院の新川達郎さん、1部では帝塚山大学大学院の中川幾郎さんらが、このたびのポスト震災社会を「文明的な転換期」と位置付け、「表現を通じた関係性の再構築が重要」と示されました。

震災発生時の14時46分には、秋田光彦住職による震災物故者への供養と焼香の時間が設けられ、参加者の面々も本尊に手を合わすなど、芸術と宗教の接点

が垣間見えたひと時でした。フォーラム終盤、次年度開催地立候補募集の呼びかけに応じて、颯爽と手をあげられたのは、南三陸町にて支援活動を行う仙台のアートNPO。「震災以降、全国からたくさんの支援をいただいた。次のホストは私たち」という真摯な眼差しに対して会場から喝采があがりました。お寺を会場に、被災地へと思いが届いた場面となりました。



全国アートNPOフォーラム
「震災とアートNPO、これからの社会へ〜自治を再発明する」

から映画と震災について語りあいました。満場の120名が参加しました。

見えるものから、見えないものへ。
「想定外」の出来事が起きたからこそ、
思いと楽しみと仕事のへつながりくを結ぶ。

■関係性のデザインの世界

2011年、年の瀬に迫るころ、應典院で「まちなかコミュニティの設計図」と題したトークを実施いたしました。メインゲストは『コミュニティデザイン』学芸出版社で知られる山崎亮さんです。出版後テレビ番組情熱大陸に出演されたことも重なる、同書は多方面から反響が寄せられ、結果として山崎さんも各地でひっぱりだこのもようです。実際、應典院でのトークにも文字通り滑り込みで会場に到着されました。

これまで山崎さんが代表を務める「Studio-1」では、住民参加型の大規模公園の計画作りや建築などのランドスケープデザインに取り組んで来られました。ランドスケープデザインとは、直訳すれば風景の設計となるのですが、その中でも特に周辺環境との調和に配慮した設計を手がけてきたことで知られています。しかし、前掲書のとおり、今、重点を置いて進めているのは「コミュニティ

デザイン」です。睡きなじみがない方でも、ある程度の想像がつくかもしれませんが、「コミュニティデザイン」とは、應典院での講演タイトル「人を結ぶ地域のデザイン」美しく幸せなまち暮らしにも反映されているように、人間関係といつ見えないもののデザインです。

山崎さんによれば、「コミュニティデザインの鍵となるのは、地域に暮らす人々のアイデアをいかに実現するかであり、自分「たち」が楽しいと思える出来事を重ねながら、それを仕事化していくこと、とのこと。よく紹介される「マルヤガーデンス」(鹿児島市の事例でも明らか)のように、多様な現場で多彩な担い手が鍵となつて積極的な実践が重ねられることが結果として人間関係がデザインされることになり、山崎さんの表現を借りるなら、自分のやりたいことと社会が求めることから「夢」を描き、やりたいことのできることを重ねて「趣味を活かし、自分ができていることを社会に投げかけることで労働」とする、それが「コミュニティデザイン」における企画の

醍醐味と仰います。

■平等のルールを変えた結果

前掲書『コミュニティデザイン』のあとがきの部分に次のようなくだりがあります。非常時には人のつながりが大切になる。言つまでもなくそれは平常時から手入れしておくべきものだ。災害が起きた後、仮設住宅を建てるように効率よく人のつながりを構築することはできない。日々の「コミュニティ活動」が大切なのだ。(251ページ)この部分が気になり、トークが終わつた後、山崎さんに「尋ねたことがあります。それは、東日本大震災の後、何か依頼される仕事に変化がありましたか」という問いです。

山崎さんによると、『コミュニティデザイン』は、東日本大震災の後に推敲を重ね、出版されたもので、それは阪神・淡路大震災を関西で経験したことが大きく影響している、とのこと。なぜなら、「困っている人を優先

するために、行政における平等のルールが変更された結果、ケアが必要な人ばかりが集まる住まいが生まれ、そこに外から尋ねる人もなく、孤独死が相次いでしまったことへの思いがこみ上げられたからだと思います。そこで現地に駆けつけたい思いを携えながら改めて、人のつながりを構築する「コミュニティデザイン」を訴えかけていくことにした、とのこと。

東日本大震災から二年。これまで「日」や「月」で「あの日」からの時間を数えていた単位が「年」に変わります。山崎さんに投げかけた、先程の質問に対しては、とりたてて変化はないものの、集落支援員の養成をしてきた経験から、地元の人々が地区ごとの将来の調整役になれるよう、少しお手伝いしているプロジェクトがある、とのこと。こうして、長きにわたる復興に向け、種が時かれ、育てられていくのだ、と感じたエピソードでした。そしてそこには、時と場を越え、阪神・淡路大震災を経験した人々の知恵と願いが重なられています。(山口洋典)

▼2月3日、文部科学省の「超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会」で「人生の締めくくりのための学びも必要」と、死生観に言及した報告書の素案が提案された。これまで国家の教育指針からはタブーとされてきた領域にもかかわらず、「日本社会では、死の実感が生活、意識、医療、教育など社会の様々な面で抜け落ち、死と向き合う経験が減少している」と認識を示し、「死と向き合うことで、生きる意味を見出し、今生きているこの一瞬を大切にすることができる」と記した。

▼近年、生と死をめぐる教育の熱は高い。高齢化が進めば、死を意識する対象層が増加する。そこに少子化の拍車がかかるから、これまで予後を預けてきた家族は不在となる。既に、誰もが当事者問題として意識しないわけにはいかないのが、生と死を巡る問題なのだ。よって「死生観」という、最も個人的な主観世界に迫る気づきと学びの機会が求められる。

▼すでに市民学習のレベルで、死生学やスピリチュアルについて関心は大きく、患者や遺族など当事者どうしが集うセルフヘルプ的な場の裾野も広い。大蓮寺や應典院による「エンディングセミナー」や「いのちと出会う会」などは、国からあれこれ「学習」を強いられる前につくりあげてきた、「死」と隣接した場である。

▼ただ「死生観」に迫る教育施策のあり方よりも、問題はこの事態に宗教がどのようにかかわるのか、だろう。現代を生きる人々が、共通の死生観は持ち得てはいない。死生観の多様化などといえば聞こえはいいが、もはやそれはなきに等しい。ない、というより、無関心なのだ。

▼あらゆる民族が宗教を死生観の基盤としている。しかし、今や浄土教は伝統習俗としてかろうじて引き継がれているのが実態であろう。家族や地域共同体が盤石の時代は、それでもよかつた。だが、現代の人々は、客観的な言い方をすれば、信仰より解決を求めているのだ。これまでの布教とは異なる、言葉や表現、スキルが必要だろう。

▼檀信徒の維持と開拓だけに動員されてきた布教力学は、もう限界だ。果たして、仏教を布教言語ではなく、現代の死生観の道標となる教育言語として語りうるのだろうか。(彦)

サリュ・スピリチュアルvol.5
2012年3月6日発行

編集長：秋田 光彦
編集：山口 洋典・池野 亮光
写真：山口 洋典

発行：大蓮寺・應典院
大阪市天王寺区下寺町1-1-27
(〒543-0076)
電話06-6771-7641
FAX 06-6770-3147
Email info@outenin.com
URL http://www.outenin.com

